

大地震発生時の自分と地域の安全について考える

小山の防災活動について

東日本大震災の被害者のご家族、関係者の方には衷心からお見舞い申し上げます。さて、今回の震災の状況から、もし、大災害が小山に起きたら…と言う観点から考えてみます。

新聞やテレビでは津波の規模や福島原発の事故を巡り、「想定外」が問題となっています。従来、「わが郷土の小山市は自然災害が無い所、自分の生きている間はいつもの通り生活できるだろう」と思っていたが、小山の大災害は本当に「想定外」でしょうか？なぜなら、火山噴火や津波被害は当地には無いと考えられるものの、発生が想定されている東海地震による、この地域の震度予測は不確実であり、被害推定も完全ではありません。また、日本列島には発見されている活断層が2000箇所以上あり、関東平野は発見しにくい地域とのことで、直下型地震も否定できません。

少なくとも小山市は、総てが「安全」を保障されている地域でないことを再認識することからスタートしなければなりません。

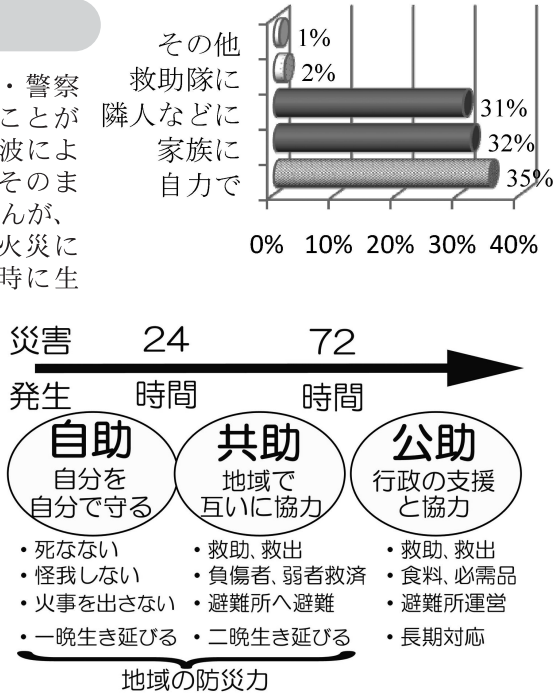
今回の特集が皆様に安全を考えて頂くきっかけとなれば幸いです。

栃木県主な地震		
1683年	天和3年	日光江戸地震。 東照宮被害
1923年	大正12年	関東大震災。 宇都宮震度5
1949年	昭和24年	今市地震。 震度6 烈震。 死者行方不明10、 家屋全壊278

自助と共助が主役

大きな災害が起きると消防・警察や行政では対応できなくなることがあります。3.11の震災では津波による被害が著しいので小山にはそのまま当てはまらないかもしれませんが、阪神大震災では家屋の倒壊や火災による被害が甚大でした。その時に生き埋めで救助された例を右図で見てみると、**大多数は身近な人たちに救助されています。**

災害が大きいほど、最初はまず、「地域の防災力」が重要です。自分で対応する「自助」とともに地域住民が協力して行う防災活動「共助」の組み合わせで、被害の拡大を防止し、行政からの援助「公助」を待つ必要があります。



「自助」 最初の24時間に耐える

災害が起きたとき、まず自分が生き延びる。出来れば怪我なく生き延びなければなりません。そのためには普段から非常時にとるべき行動を考え、訓練し、準備しておかねばなりません。

	あなたを守る非常時の行動	普段の対策と準備
身を守る	まず、落ち着いて身の安全を ・机やテーブルの下に身をかくす ・玄関等を開けて非常出口を確保 ・あわてて外に出ない。 都会ではガラスの雨	・家具の転倒／落下の防止 ※寝室では転倒防止が必須 ※通路が確保できる置き方 ・補強 (塀、出来れば古い家屋も)
防火	次に出火を防ぐ ・ガス器具、電気器具はすぐ消す ・ボヤの内に消火器、バケツで初期消火 ・避難する時は電気のブレーカを切る。 ※ショートしていると通電時火事になる	消火器の使い方、ボヤの消し方を訓練（防災訓練に参加しましょう）
避難	・避難は徒歩で、持ち物は最小限に ・隣、近所に声をかけよう ・ブロック・大谷石塀ぎわは避ける ・車はゆっくり左側に停車、エンジンoff ※キー残して徒歩で避難。	・非常持ち出しを決めておく ・避難所、一時避難場所への、経路、行き方を考える
情報	・携帯ラジオで情報収集 ・安否情報を伝える ※電話では伝言ダイヤル171 ※携帯では災害時伝言板 (パソコンからでも読める)	災害時の伝言板の場所 ・ドコモ：iメニューボタン ・au：Zボタン ・Softbank：Yボタン ・スマートフォンはいろいろ

1 非常持出品

避難するときに持ち出すものです。持出品は最小限とし、両手が使えるようリュックサックなどに入れておきましょう。

● 医薬品類

救急薬品(ばんそうこう、傷薬、包帯、鎮痛剤、胃腸薬、かぜ薬など)、常備薬(持病等のある人)生理用品など

● 貴重品

現金(公衆電話利用も考慮し10円硬貨も用意)、印鑑、健康保険証、預金通帳、免許証など

● 非常食・飲料水

乾パン、缶詰、ビスケット、チョコレートなど火を通さなくて食べられるもの、ミネラルウォーターなど

● 懐中電灯、携帯ラジオ

予備電池

● 衣類

下着、上着、靴下、など

● 日用品

マッチ、ライター、ろうそく、洗面用具、タオル、ティッシュペーパー、ウェットティッシュ、ビニール袋、缶きり、ナイフ、はし、使い捨て食器、使い捨てカイロなど

● こんなものも必要です

■ 赤ちゃん・お年寄りがいる場合

粉ミルク、おむつなど

2 備蓄品

被災後の生活をささえるものです。救援体制が整うまでの数日間(最低3日間)自活できるようにしましょう。

食料品

アルファ米、レトルトパック食品、カップ麺、缶詰など

飲料水

1人1日当たり3リットルが目安。

燃料

卓上コンロ(予備のガスボンベ)、固形燃料

「共助」 自主防災会について

今年の3/11の地震では、被害が比較的少なかったとはいえ、大きな揺れ、屋根瓦の落下、大谷石塀の転倒、家具転倒、散乱、長時間の停電などで、小山でも恐怖、後始末の大変さ、不便さを体験した方も多くことでしょう。

阪神淡路大震災の被害内容と状況から、「自助・共助」の重要性が再認識され、急速に全国に防災会の普及が進みました。小山でも最初に防災会が結成されてから13年目になりますが停滞気味です。

地震災害では、災害発生から30分は身を守る「非常時対応モード」の行動、その後24時間は自分自身で生き抜くことが「自助」の条件です。「共助」は、その後、48時間位を隣人と共に生き抜くことで、ここまでの自助の範囲です。人は思ってもいない現象に遭遇すると、当たり前行動ができず、それが被害を更に大きくしてしまうことがあります。突発的現象に素早く「非常時対応モード」に切り替え、反射的に正確な行動をさせるのが防災訓練なのです。

災害発生から72時間くらい経てば、行政機関、自衛隊、消防、警察、医療機関、全国の救援組織等の「公助」が本格的に活動可能になります。しかし事前の「自助」「共助」なければ「公助」は、役に立ちません。

「公助」 行政による救助、援助

避難所

- 避難所には市内の全ての小学校、中学校、県立高等学校と、勤労青少年ホームがあらかじめ指定されています。今回の震災の避難所の様に食べて、寝る、等ができる場所です。
- 近くの指定避難所を家族みんなでよく覚えておきましょう。
- 市が市職員、学校、自治会、民生委員、自主防災組織、ボランティア等を含む避難所の管理運営体制を決めますが、運営は学校の先生と自治会等地元住民を中心に行います。

一時避難場所

- 地震にともなう火災等から一時的に避難する場所です。
- 大きな公園などが指定されています。近隣では、駅東公園、希望ヶ丘公園、城南公園、自由が丘公園、あさひ公園、原の内公園などです。

その他の支援

行政からの支援は多岐にわたりますので市からの広報・通知に常に注目して下さい。

出典：小山市防災計画 小山市防災ガイド、消防庁自主防災組織の手引き、